



視察レポート

No.1
【イギリス】

アーバンビレッジ&団地再生

石田 富男

四年前に「美しい街を創り出す（イギリスのデザインガイド）」と題して、大学の先生の視察に同行させてもらった際の報告をしているが、昨年秋にも同様の機会を得た。今回も訪問先は多様であったが、その中から注目できる事例として二つを紹介したい。

アーバンビレッジ パウンドベリー

イギリスにおける新しいまちづくりの注目を集めたものにチャールズ皇太子の率いるアーバンビレッジ運動がある。その象徴としてあげられるのがイギリス南西部の小都市ドーチャスターのパウンドベリーのまちづくりである。

第一期計画は一九九三年から始められ七・五haの開発地に二五〇戸の住宅が供給された。この第一期計画については、ネットなどにも紹介記事があり、高い評価がされている。そこには第四期の完成まで二十五年のプランで計画されており、最終的には三千戸の住宅建設が進められると記されている。

今回の視察では、第二期以降の開発がどのように進められているのかというのが大きなきっかけであった。現地に掲げられている案内図を確認すると、第一期計画の一〇倍もの範囲が示され、現在も開発がすすめられていた幹線道路となる二本の通りには芝生の緑地帯と駐車場があり、その他の通りは不規則に変化し、歩車が共存する通りとなっている。路上駐車は禁止

されておらず、路上駐車を前提とした計画がされていると思われる。

建物にはこの地方の伝統的集落固有の土着的なデザインがとりいれている。中心部にある公園には歴史的建築物として農家が保存公開されていた。住宅の中にも歴史を感じる古い建築物もあり、元々そこにあつたものかもしれない。新築だとしたら何故そこまでというレベルだ。



パウンドベリーの案内図

タイトル画像に使ったのは、このパウンドベリーで一番美しいと思っただ通りの写真。こんなところに住んでみたいと思う。



幹線道路



地区内の道路

団地再生 パークヒル団地

イギリスでは一九六〇〜七〇年代にかけて高層の公営住宅が多く作られたが、様々な問題点が指摘され、一九八〇年代からこれらの高層住宅を取り壊して中低層住宅に再生する取り組みが各地で行われている。

四年前に訪問したバーミンガムのキャッスル・ヴェイル団地では三十四棟あった高層住宅のうち三十二棟が取り壊され低層住宅地として再生されていた。

イギリス第五の都市シエフィールドのパークヒル団地で行われている団地再生はこれらの再生事業とは異なり、高層住宅そのままのリノベーションする手法がとられている。このパークヒル団地は建設当時、「空中街路」というコンセプトを最も早く実現した団地として注目され、その後の多くの公営住宅に影響を与えたことから、イギリスの近代建築を代表するものとして、登録建築物に登録されているからである。



再生された住棟、1階に保育園



開発事務所に置かれている模型

同行した佐藤先生は三十五年前に視察されたというが、三層ごとに幅三mの空中街路を持つ一〇階建の二十棟の板状高層住宅が空中デッキで結ばれ、不規則に配置されている姿は壮観である(模型写真参照)。



空中デッキ(左:改修前、右:改修後)

訪問時は第一期工事(二〇〇七〜二〇一五)で北側の三棟の再生が行われ、二五六戸の住宅が供給された段階であった。荒廃した古い住棟が残っており、この団地でもバンダリズムなどが問題となっていたことが推察される。

広すぎる空中街路の一部は住戸に取り込まれ、かつて公営住宅しかなかった団地内に、分譲とソーシヤルハウジングと形態の違う住宅を混在させることにより、ソーシヤルミックスを実現し、さらに商業施設や医院、保育園などが組み込まれた。

最終的には第五期工事までの計画で八七九戸の住宅が供給され、そのうちの約二四〇戸がソーシヤルハウジングとなる予定だという。

問題を有する建築物であっても歴史的価値を有するということから保存の対象とし、それを大胆にリノベーションするという大いに驚いた。外観は現代的にカラフルに変更されているが、これも保存の一スタイルなのだろう。